



## 東北地域ブランド総選挙で最優秀賞・優秀発展賞

12月20日、せんだいメディアテーク(仙台市)で「東北地域ブランド総選挙」の最終審査会(プレゼンテーション最終審査)が行われました。同コンテストは、特許庁と東北経済産業局が主催するもので、東北地域の大学生が地域団体商標権者を取材し、取材に基づく地域商品やサービスの魅力をInstagram®上で発信するとともに、今後の新商品や新ビジネスのアイデア、PR方策等を競い合う大会です。本学から2チーム計6名の学生がファイナリストとして出場しました。出場したチーム横手やきそば(大淵莉子さん、野崎杏菜さん、日向海帆さん)が最優秀賞、チーム秋田由利牛(伊藤日夏さん、佐藤聖真さん、菅原伶那さん)が優秀発展賞を受賞したことを本学の山本文雄学長に1月7日、報告しました。



チーム横手やきそば：左から日向さん、野崎さん、大淵さん  
始めに益満准教授より山本学長に大会の概要・参加した経緯について説明があり、続いて2チームの代表者からプレゼンした内容についての説明がありました。山本学長からは「本学から2チームも最終審査に出場し、受賞したことは誇りに思う。これからの活躍に期待している」と同コンテストの受賞を激励しました。

チーム横手やきそばは「横手やきそばが美味しい理由(ワケ)」というテーマで発表しました。発表者のひとりである大淵莉子さんは、「横手やきそばは、第二次世界大戦後、夫を亡くし子供を女手一つで育てていかなければならなくなったお母

さんたちに一人の屋台職人がボランティアでやきそばの作り方を教え歩いたのが始まりです。まさに横手やきそばは生きるための糧でした。横手やきそばを愛する市民のみなさんが受け継いできた「郷土愛」という名のスパイスが入っているから横手やきそばがこんなにも美味しく、国内外からお客が絶えないのです」と横手やきそばの魅力をアピールしました。

本学から出場した2チームは、教育文化学部地域文化学科の「地域学基礎」を受講している1年次の学生であり、授業で各チームが作成したビジネスプランを指導教員とともにブラッシュアップし、コンテストに臨みました。堂々としたプレゼンは、審査委員はもちろんのこと、斬新なビジネスプランを聴きに会場に詰めかけた多くの観客の心をしっかりと惹きつけたようです。



チーム秋田由利牛：左から佐藤さん、菅原さん、伊藤さん

### <受賞しての感想>

地域文化学科1年次 大淵 莉子

「秋田の産品をもっと広めるにはどうすればいいのか？」シンプルだが難しく、正解のないこの問いに、私は東北地域ブランド総選挙への参加を通して半年間向き合い続けてきた。

この大会の存在を知った時、地域産品のPRや観光に興味のあった私は迷わず応募を決めた。同じようにして集まった仲間2人とチームを組み、秋田県横手市の特産品・横手やきそばをPRすること

になった。活動の内容は主に2つ。実際に横手に取材に行き、横手市や横手やきそばに関して得た情報やその魅力をインスタグラムで発信すること、そして取材を通して発見した横手やきそばの課題を解決するビジネスプランを練り、それをプレゼンすることだ。形は違うが、インスタグラムでの発信とプレゼンテーションという、どちらも「相手に伝える」という活動の中で、限られた文量の中で大切なことをどう伝えるかを常に頭に置いて発信活動を行った。

また、横手での取材の中では主に横手やきそば暖簾会会長・三浦勝則さんにお世話になった。三浦さんを始め、横手市役所や横手市観光協会、養鶏場や農家の方、さらに横手やきそば店の経営者の方など多くの方に取材を行った。その方々のお話を聞く中で強く感じたことがある。それは、横手の方々は皆、横手市と横手やきそばに対して強い郷土愛をもっているということだ。かつて横手市はB1グランプリで優勝し全国的に有名になったが、それに甘んじず、もっと横手を全国に広めようという向上心を横手の方々はもっていらっしやった。私たちもその思いに刺激を受け、さらに活動を頑張ることができた。

そして、最終的に私たちは東北地域ブランド総選挙で最優秀賞を頂くことができた。取材にご協力頂いた横手の皆さん、ご指導して頂いた先生、応援して下さった全ての方に心から感謝したい。今回の活動を通して、相手に伝わる言葉の選び方や社会人の方との接し方、プレゼンテーションのコツなどたくさんのことを学ばせて頂いた。また、横手での取材を重ねるうち、将来地域のPRや観光に関わる仕事に就きたいと思うようになり、将来の目標が明確になった。この活動によって得たたくさんの貴重な経験を、これからの学生生活や社会に出てから生かしていきたい。



### 地域文化学科1年次 佐藤 聖真

「地域ブランドを活用して、地域活性化をする」というテーマのもと、SNSアプリ Instagram を活用し、私たちは秋田県由利本荘市の「秋田由利牛」をPRしました。マーケティングなどの専門的知識は乏しいながらも、先生方にご教授いただきながら、普段から Instagram を利用しているという我々世代の強みを生かして自分たちなりに試行錯誤してきた半年間でした。これまで、地域の団体と協力して地域課題の解決を図るという経験がほとんどありませんでした。様々な世代の方がいらっしやいましたが、どの方からも共通して「地域産品に対して、人生をかけるような並々ならぬ思いがある」、「秋田大学の学生に大きな期待を寄せてくれている」ということを感じました。

取材として5回ほど由利本荘市を訪れましたが、そのなかで秋田由利牛に関する以外にも農耕地や住宅地、商業地、交通機関の様子や、鉄道、スポーツチームの存在など様々なことを知りました。地域を知ることによって地域ブランドの新たな一面や意外な切り口を見つけることができ、実際に足を運んで取材をしに行くことの重要性を強く感じました。

私がこの活動で最も難しかったと思ったことは「伝える」ことです。魅力的な産品があってもそれを多くの人に理解してもらうのは簡単ではありません。合理的に伝えるのか、それとも情緒的に伝えるのかなど伝え方によってその人の心に響くか否かは決まってきます。そしてこれは多くの団体が抱える課題なのではないかと思いました。

一年次から専門的な分野に体験的に触れることができるのは秋田大学ならではのことであり、その成果として東北地域ブランド総選挙で優秀賞を頂いたことは大変名誉あることだと思います。この経験を踏まえて、今後も恵まれた環境のもとで自分の経験値を増やしていきたいと思っています。

## 地域連携プロジェクトゼミ実習を通じたオープンキャンパス運営への提言

地域社会コース3年次 石井日向子

私は、湯沢市の有限会社ぬまくらで実習のお世話になり、オープンキャンパスのユニフォームをデザイン・作成するプロジェクトに携わった。ターゲットや伝えたいことからコンセプトを決め、そこからデザインを作り上げていくことができ、非常に有意義であった。この過程を短い期間で完遂することができたのは実習先の沼倉さんのおかげである。

良かった点として、エプロンという形でのユニフォームを学長・理事に認められ、来場者・学生からも多く支持を得られたことが挙げられる。今年度の実習生3人が大事にしたことは「リアル」と「改革」であった。「リアル」は、秋田大学が公的に発信するものでは推し量れない大学生のリアルを伝えることで、「改革」は、Tシャツ・ポロシャツなどのありがちなユニフォームから脱却し、デザインも新しいものを作ることであった。この2つを達成するため、学生が思う大学イメージをデザインに反映させエプロンを作り上げたのだが、これが大学側から認められたことで「秋田大学は自由な発想を受け入れる大学である」ことを来場者側に見せられたと考える。実際にアンケートにも、「他の大学のオープンキャンパスでもポロシャツを見かけることはあったが、エプロンは面白いと思った」という意見があった。「面白い」と思われる取り組みを拒まずに今後行っていくことで、秋田大学の良さをもっと引き出せると考える。

良い点をさらに良くするには、来年度以降もチャレンジ精神を忘れないコンセプト・デザイン考案をするべきと考える。今年度は学部ごとの色分けを昨年度と同じ4色にしたが、それには、ユニフォームに用いた色が学部色として固定されたという去年の実績を文化として引き継いでいきたかったから、という理由がある。しかし、特に理由も無く、数年連続で同じ形態・デザインのユニフォームになって

いたから、と「今年も昨年度に倣って同じようなものを……」などと思惑放棄してしまうのは良くない。来場者や学生スタッフのことを考え、以前の状況や当年度の調査により実情を知り、どのようなユニフォームを作るかを毎年全く新しい気持ちで考えてほしい。

課題点は3つある。1つ目は、現時点で当プロジェクトにおける大学と学生&実習先の連携がうまく取れないことである。ゼミ報告会で提言した通り、エプロン推薦の理由の1つである「複数人での着回しも可能」というメリットを活かすことが出来なかった。予算節約の面から評価されるべき点が、大学内のあやふやな人数把握により効果が薄れてしまったのは、正直、非常に残念である。

2つ目は、デザインの決め方である。現時点でユニフォームデザインは班内で独断的に決定して

### 今年のOCユニフォームはエプロンです！！



「global×local」  
秋田大学は、global に対応し local でも戦っていける人材育成に取り組んでいます！

「ことわざ」  
井の中の蛙大海「をも」知るということ。  
井戸(秋田大学)の中のカエル(秋大生)が大海(社会等)に羽ばたいていこう。カエルは「変える」「帰る」にもかけています。お腹に注目！

「井戸」  
アンケートで秋大生に訊いた秋田大学に対する印象を単語化し井戸にしています。今年秋田大学は70周年です！知っていましたか？最下段に書いています！



今年のオープンキャンパスでは着回し・着脱がしやすいエプロンが採用されました！デザインを行った私たちの願いは、秋大生が同じ仮面を被って良い面だけを語ること…**…ではなく！！**秋大生それぞれの個性やよさを発揮し、ひとりひとりが主体性を持ってみんならしく秋田大学をアピールできるオープンキャンパスを作り上げることです！秋田大学の魅力や自分の経験・アドバイスをよりわかりやすく来場者に伝えるためにも、ファッションを含め、皆さんの個性を活かしていただけたらと思っています！

いるが、当日のスタッフアンケートに、「デザインを募るべき」という意見が複数寄せられた。現状の運営体制では難しいかもしれないが、来年度以降、ゼミの班内のみならずデザインに関して多数の意見を参考にしても良いと考える。

3つ目は、スタッフ向け説明会を実施するべきということである。アンケートの結果、ユニフォームへの想いを知らないスタッフがかなり多いことがわかった。説明会を行うことでユニフォームの意味・コンセプトを周知する必要があると考える。

これらを解決するために、私は、「秋田大学OC実行委員会を高大連携事業の一環として作るべき」ということを提言する。前提として、オープンキャンパスには学生のみならず教員や職員も関わってくるため、先に述べた説明会を学生の主催で開くことは難しい。そのため運営する大学が説明会を開く形になると考えられるが、「そもそもオープンキャンパスの主体は大学のどの部門か？」ということが明確ではない。現状で、秋田大学の良さを大学生に伝えてもらう・高校生に知ってもらうために非常に大きな弊害があるのだ。至急秋田大学OC実行委員会を作る必要があると考える。

組織が結成されることで説明会を開けるほか、スタッフ数が判明し発注の問題を解決でき、デザインの募集も可能となる。学生の意識・モチベーションが高まることで、よりリアルを伝えやすいオープンキャンパスを開催できる。また、高校生

に秋田大学を知ってもらい、進学先をどうするか、大学に入って何をするか、大学を出た後に何がしたいかを考えてもらうためのオープンキャンパスとする必要がある。高校生が参加するイベントであるという観点から、高校との連携が不可欠であると考え、組織を高大連携事業の一環として作るべきであると考え。



## 地域連携プロジェクトゼミ：株式会社マルシメでの実習を通して

### 3つのイベント、身につけた力と学び

#### 人間文化コース3年次 照井 明莉

私は、株式会社マルシメで実習を行い、スーパーモールラッキーで毎年夏に行われる「ラッキー祭り」のイベント企画・運営に携わりました。イベントを考案するにあたって、まずはニーズ調査としてアンケートやインタビュー調査を行い、その分析結果から、どのようなイベントにすれば、お客様が喜んでくれるのだろうと時間をかけてイベント考え、最終的に3つのイベントが採用されました。クイズのイベントと宝探しのイベントは、子供から大人まで大人気のイベントになり、多くの良い意見・感想をお客様から頂きました。特に子供たちがとても楽しそうにしていたことが印象的でした。もう一つ、世界の料理の試食や情報を知ることのできるコーナーを開きました。正直お客様からの人気は低かったものの、実習先からは

今までになかったタイプのイベントで良かったといていただき、「学習」を意識した大学生ならではの視点から提案できたイベントだったのではないかと感じます。

実習中に行ったインタビュー調査や会議への参加を通して、私は「発言力」をつけることができました。今までは、自分の考えに自信を持たず、なかなか自分の考えを発信できずにいましたが、この実習では社会人と会話したり考えを発表したりする機会が多く、周りの人が私の出した意見を最後までしっかり聞いてくれて、良い反応をしてくれることも多かったので、自分の考えを話すことへの苦手意識がだんだん無くなっていきました。

実習開始から学内での報告会までの約9か月間で、発言力をつけられたことだけではなく、チームワークの大切さや、課題発見・解決能力など、様々なことを学ぶことができました。実習は慣れ

ないことも多く最初は大変でしたが、参加して本当によかったと思います。この実習で得たことをこれからの人生の中で活かしていきたいです。

### 報告会準備への取り組みとやり遂げた達成感

#### 地域社会コース3年次 高橋 由衣

私たちは株式会社マルシメで実習を行いました。実習の内容は横手市十文字町のスーパーモールラッキーで毎年行われる「ラッキー祭り」の企画・運営です。この実習の成果について12月12日に行われた報告会で発表しました。報告会では主に株式会社マルシメについての紹介、企画したイベントの内容と振り返り、来年度のラッキー祭りに向けての提案、実習を通して学んだことについて報告しました。報告会に向けての準備段階では発表時間を調整するために何度も原稿を訂正したり、スライドを見やすくするために工夫したりと時間をかけて作成しました。大変なこともありましたが、3人で協力して完成させることができました。報告会では写真を多く用いて発表することで、ラッキー祭りの様子をうまく伝えることができたと思います。加えて企画→運営→振り返りの流れに沿って発表することで、分かりやすく伝えられました。報告会では少し発表時間が長くなってしまったものの、何度もリハーサルを行い、当日に向けて準備してきた成果を発揮することができました。また、当日はお世話になったマルシメの方からも感謝の言葉をいただき、達成感を得られました。この報告会を通じて、ラッキー祭りの認知度

が上がり、より一層祭りを盛り上げていけるきっかけになればと思います。

### 報告会発表での工夫と他班からの学び

#### 地域社会コース3年次 照井 舞

私たちは、株式会社マルシメと連携し、毎年夏に開催される「ラッキー祭り」の企画と運営を行いました。地域住民に喜ばれる夏祭りにするために、ニーズ調査やインタビュー調査などを行い、当日は3つのイベントを実行しました。

報告会では、実習の内容と目標を説明し、活動の流れや考案したイベントについて紹介しました。イベントの内容については、考案した目的や良かった点・反省点などを詳しく説明することができました。また、写真を表示しながら説明したことで、報告会に参加した方たちはイベントの様子を想像しながら聞くことができたのではないかと思います。報告会の最後には、今回の夏祭りの反省と来年に向けての提案を行いました。反省の内容は、イベント面と運営面などに分類し、実際に夏祭りを運営したことで気がついたことを報告しました。来年に向けての提案は、学生ならではの視点から改善点を見つけ、より良くするための方法を提案しました。提案をする際は、具体的な案を挙げて説明することができたので良かったです。また、他の班の報告を聞いて、調査の進め方や課題解決の方法など、実習中には気がつくことができなかった点についても学ぶことができました。これまでの実習や報告会を通して得られたものを今後の学習にも活かしていきたいと思っています。



企画したイベント「クイズラッキーカップ2019」で司会進行する3人

## 心理実践フォーラム「矯正領域で生きる教育の仕事、そしてやりがい」

「矯正領域の教育を知ることを通して」

『第3回心理実践セミナー』に参加して、初めて矯正領域の教育を行っている現役職員の方々の話を聞きました。教室に入り、垂れ幕を見るなり「少年院」「保護観察」「成人刑務所」という言葉が並んでおり、私はなんとなく落ち着かず手元のコーヒーを飲み干していました。「今日は、人を律する厳格な人が来るのだな…」と思ったからです。



しかし、そんな私の偏見をよそに、先生方はとても表情豊かで柔らかい雰囲気をもった方ばかりでした。矯正や矯正領域の仕事についての説明は職業の特徴を交えた分かりやすいものでした。

私は参加するまでは「矯正＝ある人が他者の悪いところを正すこと」という上下関係がある環境の中で行動や考え方を律していくというイメージを抱いていました。しかし、どの先生も「個人と長い時間をかけて向き合い信頼関係を築いたうえで、一緒に個人の問いを見つめ、計画を立てて社会復帰を目指す」という矯正の考え方を持っていることに気づき、そしてこれは学校現場で児童生徒と関わる姿勢や態度の手本になるように感じました。



現在、私は教職を目指しています。今回のセミナーに参加したことで、何のために教育があるのかということや、どのような姿勢で児童生徒と向き合うかという、教育に携わるとき

に根底になる理念について考えさせられる機会、そして、考えなければならぬと気づく機会を得ることができた。教科の指導法や生徒指導、専門教科の演習、児童生徒や保護者への対応などの授業を多く受講しており、もちろんそれらも教職に就く際に必要で必須な知識や技能であるが、私は

### こども発達コース3年次 渡部 真季

土台をしっかりとっていなかったのだということに3年目後期後半にして気づきました。私は何をしていたのだ、という気持ちでいっぱいです。

また、矯正領域という、一学生である自分からは積極的に実態を知ろうとしない(あるいは怖くて近づけない)領域に関して知る機会を得られてよかったと感じています。自分は矯正領域について何も知らず、偏見をもってニュースや論文を読んでいたこと思い返すととても恥ずかしいと思います。ですが、とても勉強になったので他の矯正領域に関するセミナーがあれば参加し、次回は座談会にも参加したいと考えています。

第3回 心理実践フォーラム

『矯正領域で生きる教育の仕事、そしてやりがい』

2020年1月22日(水)

12:50~14:20

於: 教育文化学部60周年記念ホール  
(教育臨床概論II 授業内)



12:50~12:55  
趣旨説明・ご挨拶  
秋田大学教育文化学部 学部長 佐藤 修司

12:55~13:30  
講演① 「少年院とは～非行少年の立ち直りに向けて～」  
法務省矯正局少年矯正課 企画官 山本 宏一 氏  
(本学OB)

13:30~13:50  
講演② 「保護観察領域で活かされる矯正職員の専門性」  
福島自立更生促進センター 保護観察官 新屋敷 元 氏  
(本学OB)

13:50~14:15  
講演③ 「成人刑務所でのかわりとやりがい」  
秋田刑務所 教育専門官 後藤 亘 氏

14:15~14:20  
感想記入

主催: 秋田大学教育文化学部附属教職高度化センター



## 先輩と語ろう 座談会「矯正領域における教育の仕事」

「向き合い続ける大切さ」

私は今回「先輩と語ろう 座談会」に参加し、矯正領域で働いている先輩方のお話を聞くことができました。私は今まで少年院での仕事は少し怖いなど感じていました。しかし、先輩は「彼らが暴れるのは必ず理由があります。そこをどうやって引き出してあげるかが私たちの仕事です。」とおっしゃっていました。やはり、私たちは勝手に「矯正領域で働くのは怖い、もしかしたら殺されるかもしれない」と決めつけていることばかりであることが改めて分かりました。彼らが自分から話をしてくれるまで信じて待ち、彼らとの信頼関係を築いていくことでその心配がなくなるのだと感じました。また、少年院に来る子どもの多くはちゃんと叱ってくれる、本気で相手にしてくれる大人の存在がなかったことが多いという言葉聞き、孤立させずに関わり続けることが大切であることが分かりました。これは将来子どもができた時はもちろん、学生である今からでもできることだと思います。自分の一言で人生を変えられるかもしれないということを常に感じながら、人とコミュニケーションをとっていききたいと感じました。

そして何よりも少年院では常に少年達と生活しているため、成長した瞬間に立ち会えるのが矯正領域分野の魅力だと感じました。だからこそ信頼関係もより強いものになるのだなと思いました。どちらの先輩も自分の仕事が本当に好きで、彼ら

### 心理実践コース2年次 阿部 有翔(ゆう)

のことを愛しそうに、楽しそうにお話している姿を見て、本気で真剣に少年達と向き合っていることが伝わり、こうやって働けたら幸せだなと感じました。

将来の夢が曖昧で不安な今、自分はどうな分野でどのような形で人々を助けていきたいか、自分にしかできないことは何なのか、とても考えさせられました。私も先輩のようにこの仕事に就きたいと強く思えるような出来事に出会えたら良いなと思いました。そして色々な場面で心理学の知識が生かされていることも改めて感じる事ができたので、大学でも勉強もこれまで以上に頑張っていきたいと思います。すごく貴重な経験をさせて頂いたことに感謝します。ありがとうございました。

### 先輩と語ろう 座談会 「矯正領域における教育の仕事」

2020年 1月22日(水)  
15:00~16:00  
秋田大学 教育文化5号館 209教室

#### ◎ 企画趣旨

法務教育、保護観察官、教育専門官、法務技官(心理)など、教育学や心理学の知識を生かして国家公務員として働くことができます。今回は、法務教育、保護観察官等の仕事を経験されたベテラン・若手の2名の先輩をお招きして、学生との座談会を開催します。実際の仕事の内容、様々な専門職種、待遇、そして試験に向けたスケジュールや準備など、疑問やホームページ上の情報では得られない情報について、さっばらに、かつ直接やり取りできる機会です。興味のある方は、ぜひこの機会にご参加ください。(右記メールアドレスに、当日までにお申し込みください)

＜今回の先輩＞  
やまもと こういち  
山本 宏一 氏  
法務省矯正局少年矯正課  
企画官  
しんや けんげん 氏  
新屋 敦元 氏  
福島自立更生促進センター  
保護観察官(矯正局から人事交流にて出向中)



## こども発達コースでの学び

### こども発達コース3年次 宮崎 華帆

私たちは幼稚園教諭免許や保育士免許取得を目指し、将来保育施設等で活躍できるよう、日々励んでいます。座学では、幼児教育・保育についてその基本から学び、仲間との意見交換を通して考えを深めていきます。議題となることはすぐに答えなので問題ではなく、時にはモヤモヤしたまま授業を終えることもあります。ですが、そのような授業を重ねるごとに理解が深まり、意見交換が楽しく感じられます。また、子どもの発達や心理、制度、現代における課題についてなど幅広く知識を得ることや、製作活動や赤ちゃんの人形を使っての着替えや沐浴などといった実践にむけた学びもあり、その一つ一つが自身の強みとなります。

実習は、附属幼稚園、保育所や認定こども園、乳児院で行わせていただき、実践的な活動を通してたくさんのことを学んでいきます。座学で得た学びを、実際の子どもの姿を通してより深い理解へと結び付けたり、新たな疑問について考え続けたりと、座学だけでは得られない学びを深めていくことができます。実習は2年次と3年次の2年間を通して受けることができ、実習と座学を繰り返していく中で子ども理解を深めていくことができます。実習後はエピソード記録や指導案をまとめて冊子とする活動があり、実習でお世話になった先生方にも指導していただきながら、次の実習や将来のために記録を残していきます。

このコースでは、幼稚園教諭免許と保育士免許

以外にも、小学校教諭免許や特別支援教諭免許も取得することができ、幼小連携やインクルーシブ教育・保育など、現代的な課題についても幅広く学習することができます。コース自体が少人数なのでとても仲が良く、和気あいあいとしながら学び合っています。幼稚園教諭・保育士を目指す学生にはぴったりなコースだと思います。ぜひ私たちと一緒に充実した大学生活を送りましょう！



新入生歓迎会の様子



オープンキャンパスの様子

**こども発達コース3年次 福田 裕香**  
 こども発達コースでは、各学年20人程度ずつの全体で80人ほどで学んでいるコースです。幼稚園教諭、小学校教諭の免許状や、保育士資格のほかにも、中学校免許、高校免許、特別支援学校教諭の免許状や、社会教育主事、学校図書館司書教諭などの資格、また、認定心理士などを併せて取得することが可能です。こども発達コースの教員は様々な分野の教員が在籍し、主に乳児期から小学生の子どもの生活や教育に関わる幅広い課題について、教育学や心理学の視点など興味・関心のある視点から思う存分、学習することができます。

す。そのため、教科にかかわらず、小学生についてはもちろんのこと、乳幼児期から一生涯にわたる教育について幅広い視野をもてる学習ができます。

特に、2年次からは専門科目を履修したり、実習に参加したりすることで知識や経験を深めていくことが出来ます。「心理学特殊講義(人間関係の心理学)」という専門科目の中の一部では、私たちが普段当たり前に行っている「コミュニケーション」についてゲームや議論を交えながら理解を深めていきました。また、小学校教諭の免許状の取得を目指していますが、幼児期の子供についての専門科目も受けることができ、子供理解に大きく繋がっていると教育実習に行った際などには実感します。

このように、私の場合では、心理学の視点から、また他にも社会教育や教育思想など様々な興味に対応しているコースです。

一年を通してはコース内でのイベントも何度か開催され、パワフルで楽しいコースです。ぜひこども発達コースで充実した楽しい毎日を送りませんか。



作業の様子



シャボン玉飛ばしの様子



## 一般教育と教養基礎教育—学部の歴史をたどる②

現在、教養基礎教育と呼ばれているものは戦後、一般教育と称されていました。戦後教育改革によって、旧制の大学（3年制）と、その準備教育機関でもあった高等学校（3年制）が一体化される形で新制大学（4年制）がスタートしました。これは、いわゆる旧制帝大と呼ばれる東京大学などが該当し、多くは、高等学校、高等師範学校、専門学校、師範学校を母体として発足するわけですが、基本形として、一般教育2年+専門教育2年の形で統一されることになります。

大学令（1918年）では、「大学ハ国家ニ須要ナル學術ノ理論及応用ヲ教授シ並其ノ蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トシ兼テ人格ノ陶冶及国家思想ノ涵養ニ留意スヘキモノトス」とされ、高等学校令（1918年）では、「高等学校ハ男子ノ高等普通教育ヲ完成スルヲ以テ目的トシ特ニ国民道德ノ充實ニカムヘキモノトス」とされていました。

戦後の学校教育法（1947年）で、「大学は、學術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道德的及び応用的能力を展開させることを目的とする。」とされます。「広く知識を授ける」という部分が教養教育、一般教育に該当します。忘れられてはならないのは、大学が学生の「知的能力」、「応用的能力」だけではなく、「道德的能力」の展開を求められていることです。大学を卒業した人は、それ以外の人に比べて、より道德的でなければならないのですが、そうとも限らないのが実情でしょう。

明治時代にスタートした帝国大学はアメリカ人、イギリス人、フランス人、ドイツ人などの「御雇外国人」が教授となっていて、明治政府は欧米の進んだ知識、技術を日本人学生に伝え、取り入れようとしていました。授業が外国語で行われていたので、その準備教育機関である高等学校では語学教育ち力を入れていましたが、同時に、文系、理系を含めた教養教育が教授されていました。また、しばらくは秋入学で、週五日制であったことも、「お雇い外国人」が教授であったことと関連します。「お雇い外国人」の給与が大臣以上であったようで、その経済的負担の大きさから、日本人の教員が育つにつれて、「お雇い外国人」教授は帰国し、日本人教員が主体となり、日本語で授業が行われるようになっていきます。

戦後に作られた大学設置基準では、大学の卒業要件を、4年以上の在学とともに、

- ①一般教育科目については人文、社会及び自然の3分野にわたり36単位
- ②外国語科目については一の外国語科目8単位
- ③保健体育科目については講義及び実技4単位

④専門教育科目については76単位と規定していました。

この一般教育は人文科学、社会科学、自然科学からそれぞれ12単位ずつ取る形になっていることが多かったように思います。このような在り方に対しては、以下のような批判が見られました。

- ・高校までの内容の繰り返しで面白くない
- ・概論的なものが多くて深く学べない
- ・早く専門をやりたいのにできない
- ・マンモス授業、マスプロ授業で、一方向的
- ・教養教育が専門教育よりも下位に見られる
- ・教養教育担当教員が卒論指導を担当できない
- ・学問の深化、社会的課題の複雑化にも関わらず、専門教育の単位数を拡大できない。

そのため、臨時教育審議会、大学審議会の答申を経て、1991年に大学設置基準の「大綱化」が行われ、卒業要件は大学に4年以上の在学と、124単位以上の修得のみとされました。社会全般に規制緩和、自由化の流れもありました。

それまで、大学によって、教養教育を担当する教員を、「教養部」として組織していたところや、秋田大学のように、教育学部に所属させていたところがありました。

- ・教養教育担当教員を各学部への「分属」させる
- ・教養教育及び専門教育を全教員が担当する
- ・教養教育の必要単位数を縮小する
- ・教養教育の各分野の単位指定をなくす
- ・「くさび」型にして低学年でも専門科目を、高学年でも教養教育を受講できるようにする
- ・教養教育担当教員を核として学際的、文理融合的な新学部を設置する

などのことが全国で行われました。

秋田大学の場合、教養教育担当教員は当時の教育学部に所属していました。生物や地学、数学などは専門教育担当者と教養教育担当者とを分けていませんでしたが、物理と化学については、物理第一講座と化学第二講座が鉱山学部の教養教育、基礎教育を担当していました。逆に、物理第二講座と化学第一講座は教育学部の教養教育、基礎教育、専門教育を担当していました。1998年の改組の際、物理第一講座と化学第二講座は工学資源学部に移行することになります。あと、医学部に情報と英語1名ずつが移動します。当時の名簿を見ると、改組前の教育学部には1997年に142名がいましたが、2003年には119名となっています。

全国的に見ると、「大綱化」の結果として、実質的には教養教育は縮小されていったと言えるでしょう。教養教育のあり方を、責任を持って考え、担う部署や人がなくなったことの影響は大きかった

と思います。弊害をなくすために行ったことが、別の問題を引き起こすこととなります。その最たるものがオウム真理教の事件でした。1995年3月20日の地下鉄サリン事件（13名死亡、6千人以上が負傷）が一番大きなものですが、松本サリン事件、坂本弁護士一家殺害事件など、数々の事件を起こしました。そこに参加した幹部信者が医者や科学者など有名大学の卒業生でした。「専門バカ」という言葉もありますが、最先端の科学技術が悪用されることで、極めて危険な状態がもたらされることとなります。

新興宗教も大学では問題になります。学生が勧誘のターゲットになり、洗脳（マインド・コントロール）され、学業が続けられなくなったり、違法な霊感商法等の加害者になったり、家族との縁が切れたりします。受験競争、学歴社会の中、高校までの受験を終え、都会に出てきて一人暮らしなどをする中で心にぽっかりと穴が空き、そこに新興宗教が入ってくるわけです。

たこつぼ化の弊害も昔から言われてきた点です。日本はそれぞれが関連性を持たずにばらばらになっているのに対して、欧米の科学は「ささら」型で、一つの根っこを持っていると言われます。文系、理系、学問分野を問わずに、博士号のことを、Ph.D (Doctor of Philosophy) と呼ぶように、文系も理系も philosophy から派生しています。もともと、専門課程である医学、法学、神学の課程に進学するための準備課程であったリベラルアーツ（自由学芸: liberal arts）が諸学部の源流になります。自由七学芸とも言われますが、それは文法学、修辞学、論理学、算術、幾何、天文学、音楽を指します。自由人として持つべき素養であるので、「リベラル」と称するわけです。一つだけではなく、幅広い教養を持つことは、ルネサンス期の多学多才なミケランジェロやダヴィンチなどにも表れています。偏見や妄執から解放され、自由であるためには幅広い教養が必要なのです。

加えて、最近では「社会人力」（経済産業省）が言われ、それに対応する形で、中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」（2008年12月）では、「学士力」として、以下のことが挙げられています、教養教育の重要性が見て取れます。

1. 知識・理解（専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解するとともに、その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連付けて理解する。）
  - (1) 多文化・異文化に関する知識の理解
  - (2) 人類の文化、社会と自然に関する知識の理解
2. 汎用的技能（知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能）
  - (1) コミュニケーション・スキル（日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる。）
  - (2) 数量的スキル（自然や社会的事象について、シンボルを活用して分析し、理解し、表現することができる。）
  - (3) 情報リテラシー（情報通信技術(ICT)を用いて、多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる。）
  - (4) 論理的思考力（情報や知識を複眼的、論理的に分析し、表現できる。）
  - (5) 問題解決能力（問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を確実に解決できる。）
3. 態度・志向性
  - (1) 自己管理能力（自らを律して行動できる。）
  - (2) チームワーク、リーダーシップ（他者と協調・協働して行動できる。また、他者に方向性を示し、目標の実現のために動員できる。）
  - (3) 倫理観（自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる。）
  - (4) 市民としての社会的責任（社会の一員としての意識を持ち、義務と権利を適正に行使しつつ、社会の発展のために積極的に関与できる。）
  - (5) 生涯学習力（卒業後も自律・自立して学習できる。）
4. 総合的な学習経験と創造的思考力（これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力。)

【文責：佐藤修司】

発行 **秋田大学教育文化学部／教育学研究科**

〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1 TEL 018-889-2509 FAX 018-833-3049

教育文化学部・教育学研究科HP <http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/>

学部研究科通信「みなおと」バックナンバー⇒[http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu\\_magazin.html](http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_magazin.html)

教職大学院通信「暁鐘の音（かねのね）」⇒[http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/graduate/graduate\\_magazin.html](http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/graduate/graduate_magazin.html)

\* 誌名「みなおと」の由来である秋田県女子師範学校校歌（1910年制作）を聴くことができます。

[http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu\\_symbol.html](http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_symbol.html) をご覧ください。